タイル工事業

下町に生きる世界トップレベルのタイル職人会社
～社員を職人として自立させるのが親方の責任～
7-6 有限会社 金澤タイル工業所

文字通り“たたき上げ”のタイル職人

中学校を卒業してから東京品川職業訓練所のタイル科を修了した直後の昭和 39 年 4 月。若き日の親方・金澤氏（有限会社金澤タイル工業所代表取締役）は、優秀なタイル技能者として有名な師匠が営んでいた「有限会社馬場タイル工業所」の門を叩いた。師匠は怖かった。できが悪いと何も言わずにハンマーで壊す。師匠は何も言わないから悪いところがどこかは自分で考えなくてならない。「いい勉強になった。身内以上にお世話になった師匠には感謝している。」（親方・金澤氏）。

施主に「愛されろ」、「好かれろ」、「喜ばれろ」と教える親方・金澤氏

９年の間、「馬場タイル工業所」で修行を積み、昭和 48 年に退社、「金澤タイル工業所」を個人創業した。その後、平成元年に有限会社化して今日に至る。

師匠にほめられたい一心で挑戦した技能検定

2 級タイル張り技能士の検定に合格した（タイル張り技能士には 3 級がない）のは、馬場タイル工業所に入社して 6 年が経った昭和 45 年である。少しずつ独立したかたちで仕事をすることが許されつつあったその頃、師匠に、「技能検定を受けてみてはどうか。」と薦められた。厳しい師匠にほめられたいという一心で、土日返上で練習に明け暮れ、生来の勝ち気、負けん気も手伝って合格することができた。「師匠が自分の自立を促してくれた。」と親方・金澤氏は振り返る。多忙なうちに年月が経ち、14 年後の昭和 59 年には 1 級も取得した。このような段階を経ながら技能を身に付けていくなかで、「安い材料だって、いい仕事はできる。」ということを学ぶことができたのは親方・金澤氏にとって大きな収穫となった。

世界レベルの技術力を後進の指導に生かす

金澤氏は過去数回、全国タイル張り競技大会に出場し、昭和 56 年（第 4 回）では第 10 位、1 級技能検定合格直後の昭和 60 年（第 5 回）には第 3 位になっている。そして平成元年（第 6 回）、ついに第 1 位最優秀賞を獲得。その後、平成 10 年東京都優秀技能賞、平成 13 年優秀施工者国土交通大臣顕彰の受賞と続く。平成 19 年にはユニバーサル技能五輪国際大会にて感謝状も授与されている。平成 20 年には新国立劇場で上演された舞台劇「シュート・ザ・クロウ」における演技指導（タイルを張る芝居の指導）を任されるなど、その技術への評価は建築分野を超えている。平成 9 年以降は技術専門学校やものづくり大学建設技能工芸学科における講師、東京都技能検定委員、技能五輪全国大会競技委員など、後進の指導にあたっている。「人に教えるのがわりと好きなんだ。」と嬉しそうに話してくれた親方・金澤氏。下町の職人 5 人の事業所で、このように世界レベルの育成・指導が日常的に行われているということに驚かされる。

社員を職人として自立させるのが親方の責任

「社員がいるかぎり、生活を保障しなければならない。それが自分の責任だ。」と金澤氏は言う。そのためには、職人に自信を持たせて自立できるようになってもらうことが必要だ。それをしてやることが義務でもある。55 歳を過ぎた頃から、そういう自覚が強くなってきた。40 歳頃までは職人を雇っても厳し過ぎて定着しなかった。「今は気持ちを切り替えて、目をつぶることも学び、厳しさを変えた。」を語る。しかし、甘やかすことはしない。「2 級は会社の為に合格してもらう。だから会社で面倒を見てやる。練習や勉強のための時間、場所、材料、受検料も会社が提供する。」と人材育成の方針を社長の表情で語る。「しかし、1 級は自分のために合格するものだ。場所と材料は提供するが、時間は自力で確保してもらう。」と、今度は親方の表情で語った。

自宅兼仕事場

有限会社 金澤タイル工業所

- 業種：タイル工事業（タイル、れんが、ブロック工事業）
- 住所：東京都江戸川区一之江
- 代表者：金澤久雄
- 設立：平成元年
- 従業員：5名
- 技能士：5名

技能士へのインタビュー

伊藤　俊司氏　（24 歳）　2 級タイル張り技能士
松本　静氏　　（23 歳）　2 級タイル張り技能士

日本一になりたくて親方の門を叩いた

伊藤技能士

伊藤技能士は、平成 17 年に東京都立足立技術専門校を修了した直後、はじめて技能五輪に出場した。結果は芳しくなかった。その悔しさから、何としても日本一になってやろうと思った。「やるなら、何でもトップになれ」が信条だ。当時の教員から「技術を高めたいなら、金澤タイル工業所がいい。」と聞かされ、親方の門を叩き、やる気を買われて入社の許しを得た。平成 18 年の技能五輪には職人として初めて出場し、第 2 位（銀賞）を獲得したが、まだ納得ができなかった。そして平成 20 年、3 度目（職人としては 2 度目）の出場で見事第 1 位（金賞）を受賞した。

検定合格の結果以上に練習プロセスに意義

技能士であることは、「自分の実力の客観的な証拠として名刺に書くこともできるし、何よりもお客さん（施主）の安心につながる。」と、伊藤技能士は技能検定制度の効用を挙げてくれた。決められた時間内に与えられた課題をこなさなければならない技能検定は、普段やっている仕事のやり方とは違うことに挑戦するものである。だから、練習すればするだけ必ず自分にとってプラスになる。練習したこと、特に仕事の段取りが身に付くばかりでなく、自信もついてくる。伊藤技能士は「技能検定は国家検定なのだから、難しくて当然だ。」、「等級に見合う技能レベルを維持するためには、実務経験 2 年で受検資格が与えられるような制度緩和は好ましくない。」、「ギリギリで合格できるようなレベルでは意味がない。」、「努力の甲斐がある難易度が必要。」などなど、辛口の意見が次々と出てくる。技能検定（2 級）の受検・合格の経験が、こうした「こだわり」を口にする自信を深めてくれたのであろう。技術に対する自負、それを担う自分自身への信頼を獲得することが、お客様（施主）に対する最高のサービスであるという強い自覚がうかがわれる。伊藤技能士の 2 年後輩である松本静技能士（2 級）も、「技能検定に合格したことは自信とプライドに繋がった。もっと技術レベルを高めて、ものづくりの大切さや、職人の地位の向上に貢献したい。」と語ってくれた。

松本技能士

自力で 1 級技能士の取得を目指す

「1 級は自分のために取るものだ。だから自力で勉強や練習のための環境をつくらなくてはならない。兄弟子たちも同じようにやってきたこと。当然のことだ。」と伊藤技能士はあっさりと言ってのけた。しかし、「自分は恵まれている方だ。」とも言う。「受検料も含めて、自力で受検し合格するのは並大抵なことではない。やる気はあっても、時間が確保できない、材料の用意ができない、練習する場所すらない・・・といった事情で、なかなか実行に移せないと言う人も少なくないだろう。それに比べれば、自分は恵まれている」。だから、「親方のおかげで自分は成長した。親方にはとても感謝している。」と率直な気持ちを親方の目の前で言い切った。

これから挑戦する人へ～不器用な方がいい

伊藤技能士はみずからの性格を「頭が固く、負けず嫌い。へそ曲がりで不器用な男」だと言う。兄弟子たちには、「コイツ使いづらいヤツだな。」と思われていただろうと振り返る。しかし、伊藤技能士によると、技能検定に挑戦するなら、不器用な方がいいらしい。不器用な人は器用な人の 3 倍は努力しなければならない。一夜漬けでは到底合格できない技能検定では、この 3 倍の努力がそのまま実力の蓄積となって実を結ぶ。親方の金澤氏も「不器用な子を育てる方が楽しい。若い頃の失敗はいっぱいあってもいい。次に自分が教える立場になったときに生きてくる。」と不器用な若手にエールを送る。職人になって 3 年目にようやく当初目標の技能五輪日本一を果たした伊藤技能士らしい、若い世代への応援メッセージとして受け止めておきたい。